

終章

1. 編纂の経過

2007年の秋に再開された本学の点検・評価の活動は、ひとまずこの「点検・評価報告書」
として結実するに至った。まず、この報告書の編纂の過程を記しておきたい。

2007年10月、認証評価推進事務室立ち上げの後、9年ぶりの全学的な点検・評価をどの
ように進めるか施策を練った。そこで、報告書はどのように記載すればよいかマニュアル
も含めた諸資料をメーリングリストや点検・評価専用のホームページを活用し、提供する
こととした。全組織に対し、まずは大項目の到達目標のみ記載を求め、全体の進捗を見な
がら夏季休暇前までに「点検・評価報告書」の草案を書き上げるため点検・評価を行うよ
う喚起した。提出された報告書の内容、形式、表現方法などについて、全学委員会委員、
各組織の責任者、執筆分担者及び認証評価推進事務室との間で繰り返し意見交換をしなが
ら、よりよい「点検・評価報告書」を完成させるべく努力を続けてきた。

その過程において、各組織から提出された改善要求の中には、全学的に解決すべきもの
が少なからず含まれていることが明らかとなり、それらについては、教学・事務局役職者
において、今後、全学的な合意を形成しつつ実現に向かって努力していくことが確認され、
さらに、そのことに対しての法人側の一定の理解も得られた。まさに、点検・評価の結果
と改革とが結びつくことが示されたということができるのである。

編纂の終盤においては、学長、副学長、担当学長補佐が全体を通覧し、全学委員会委員
及び認証評価推進事務室と各組織の長、及び執筆分担者と直接話し合い、細部における修
正を行いながら、「点検・評価報告書」として作成するに至った。以上がおおよその経過で
ある。

2. 点検・評価の成果と明らかになった問題点

「点検・評価報告書」が作成されるその過程において明らかとなった、またこの報告書
に現れた様々の成果や問題点を総括しておきたい。

序章の中で、点検・評価において各組織における議論がいかに重要かを繰り返し強調し
た。これを受けて、いくつかの組織においては、十分な議論を繰り返し行い、組織からの
視点と全学的な視点がかみ合い問題の本質と解決への道筋をある程度まで明確にし得て
いた。これに対し、組織において議論が行われながら、その議論の焦点が全学委員会に伝わ
らず、また全学委員会などの議論が組織の執筆者にまで伝わらないため、点検・評価の過
程で組織の直面する問題の解決の方向を明示できなかった場合もあった。これは全学委員
会と組織との間の意思疎通がうまくいかず、組織において議論の活性化のための条件整備
ができなかったため、その責任は主として点検・評価を主導する側にあったと言わねば
ならない。また組織によっては、必ずしも積極的に議論を行うことなく、一部の教員に執
筆を一任することで済ませようとする傾向があったことも指摘しておかねばならない。

点検・評価は、法改正で義務化されたから取り組むのではなく、社会から付託を受けた
高等教育機関としての当然の責務として、自発的に取り組まねばならない。事実、点検・
評価によって、我々が得たものも決して少なくはなかった。

第一に、点検・評価を通じて、近年重視されている教育面での諸課題の存在について、
多くの教員が自覚を持ち始めたことである。日常的に行っている教育上の様々な活動がど
のような意味をもっているのか改めて問い直されたことは、今後教育改革を進めていく上
で極めて重要な意味があった。日常の教育活動は、当然ながら「無意識に繰り返される業
務」ではなく、「創造性を持ち得た活用可能なもの」として我々自身によって確実に見つけ
直されたのである。

第二に、我々は点検・評価のための議論を進めながら、各組織の個別の問題の多くが、大学全体が直面している問題に根ざすものであることを認識するに至ったということである。このことは序章でも述べたが、個別の問題解決の糸口がどこにあるのかを我々はより深く理解し得たと思われる。

第三に、素朴なことながら、他の学部・学科、研究科、研究所が、どのような問題で苦しんでいるのかを知ることができたことは重要な成果である。附属中・高等学校及び「みなとみらいエクステンションセンター」を含めれば4キャンパスを有し、18,000名に近い学生・生徒を有する本学園にあっては、異なる学部・学科の状況を具体的に知ることは極めて難しい。こうした現状において、各学部・学科、研究科などの状況が詳細に報告されたことは、全学のアイデンティティ形成の上で重要な意味を持つと思われる。

第四に、点検・評価を通じて各学部・学科、研究科、研究所の問題点が明瞭になったことにより、様々な面において、改革が一層加速されることが予測されることである。かつての自己点検・評価の後、本学は改革を急ぐあまり大いなる苦勞を余儀なくされたが、2008年度からは3年ごとに行う自己点検・評価と一体化した改革として、地に足の着いた確実な改革を迅速に進めていくことも十分に可能となっている。

最後に、全学の教職員の協力のもとに完成に至ったこの「点検・評価報告書」が、認証評価受審の重要な一歩であるとともに、2008年度に創立80周年を迎え、将来構想の策定に基づき中期計画を策定・推進する本学園にとって、その第一歩であることを改めて確認してまとめとする。